



2020年10月15日発行（季刊）



う 羽 化 か

ISSN1880-8646
2020年10月
第120号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1-1105 Tel 090-9003-7279
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
編集責任者 木 下 和 久



目 次

漢点字の散歩（57）（岡田健嗣）	1
点字から識字までの距離（113）（山内 薫）	11
わたくしごと（木村多恵子）	16
漢文のページ	23
ご報告とご案内	25
編集後記（木下和久）	27

漢点字の散歩（五十七）

岡田 健嗣

カナ文字は仮名文字（8）



長らく本誌の発行ができませんでしたが、今回は会員の皆様の力強いご協力の下、一二〇号の発行が実現できました。

今回はご承知の通り、新型コロナウイルス・ウイルス・COVID・19の世界的な流行という、ついこの年明けまでは予想もしていなかった事態に直面して、しかも今現在も収束の見通しが立たないという状況に置かれて、本誌の休刊を余儀なくされました。季刊の発行を予定しておりますので、二回分を休刊したことになります。横浜・東京の会員の皆様は、このような困難の中、通常の活動を続けて下さっております。その活動の一つである本誌の発行も、活動を継続してください。感謝

に堪えません。

この間、暫く時が空きましたので、この稿を起こしましたその事情につきまして、改めて申し上げるところから始めさせていただきます。

視覚障害者の使用できる文字は、触読できる文字である（点字）に限られます。（点字）は、今から二百年前の一八二五年に、フランスの視覚障害者・ルイ・ブライユによって考案されました。（⠠）の六つ点の組み合わせによって、アルファベットと文章記号を表すところから始まりました。

それまでの視覚障害者に与えられていた文字は、一般の視覚に訴える文字を、木の板などに浮き出させて、指先で線をたどって触知するものでした。一見合理的に見えますが、「触読」という観点から言えば、文章を読むには極めて不適當と言わざるを得ないものでした。ブライユとその周辺の視覚障害者の若者たちは、その読み辛さに深く不満を抱いておりました。そこで当時の軍隊が使っていた夜間の触読用暗号を知る機会を得て、それを更に単純なものにして、ついに縦

三つ・横二列の六つの点でアルファベットを表すという方法に至りました。これが現在もお視覚障害者にとつて唯一の文字である〈点字〉の誕生です。

この〈点字〉は、欧米の視覚障害者に革命的な恩恵をもたらしました。それは、フランスから興り、欧米の言語を表す文字であるアルファベットの特徴である音素文字の利点を大いに生かして、アルファベットという基本は崩さずに、各国の言語に適合した、各国語の〈点字〉が開発されたのでした。その結果として、それまでの浮き出し文字とは異なり、触読に堪えうる、音読も可能な触読文字として、〈点字〉は成長したのでした。

ちようどそのころわが国は、幕末から明治維新という激動期に差し掛かっていました。欧米から見れば帝國主義の絶頂期であつて、列強は、鵜の目鷹の目どわが国に迫つておりましたし、わが国は、何としてでも独立国としての体裁を維持しつつ、欧米の文化を取り入れて、欧米列強に比肩し得る国力を付けるべく努力していました。その中に教育制度があり、富国強兵に

叶つた教育を行うべく学制を整備したのでした。その学制の整備の中に、障害者の教育も、欧米の文化の一つとして入つて来て、日本語を表す〈点字〉が必要だということになったのでした。このようにして視覚障害者の公的な教育が始まり、わが国の言語である日本語を表す触読文字として〈日本語点字〉が開発されて、その教育の現場で使用され、普及が図られるようになりました。しかしその〈日本語点字〉は、わが国の言語である〈日本語〉を表している〈漢字〉は開発されぬまま、〈カナモジ〉、しかも一種類の〈カナモジ〉だけが作られて現在に至つております。

このようにして欧米とわが国の視覚障害者は、〈点字〉という触読文字を手に入れることができたのですが、わが国の視覚障害者には、極めて大きな課題が残されました。それが〈漢字〉です。

私たちが英語を学ぶ時、最も力を入れるのが「単語」の習得です。「単語」をどれだけ覚えたかが、英語をどの程度使えるかの判断の目安とされます。その

ために英語の試験では、広い範囲の分野からその材料が集められて、単語の数の多さ・意味の広さ・使い方の幅広さが試されます。現在ではそれに加えて、どれだけ聞き取れるか、どれだけ話せるかが大事だとされて、聞いて答えるという試験が一般化しているようです。何れにせよ英語の習得は、今も昔も、「単語」の習得であることは変わっておりません。

英米人から見た私たち外国人が英語を習得しようとする時ばかりでなく、英語を母国語とする人びとも、英語の「単語」の習得に勤しんでいると言われます。英語の基本はその「単語」であって、その数と意味と使い方の習得が、欧米の社会を生き抜いて行くのに必須の条件であるからに他なりません。「単語」の量と質、言い換えれば「語彙」の豊富さこそが、社会で求められているからです。

振り返ってわが国の言語である（日本語）はどうでしょうか？外国人の方が日本語を習得しようとする時、どのようにしているのでしょうか？

実際の教材や教育の方法については、私は全くの門

外漢ですので、何も知りません。しかしそれでも想像を巡らせるなら、文字はアルファベットを用いたローマ字がありますので、恐らく入門の段階ではそのローマ字で表された教材を使用することになるのでしょう。しかしローマ字は、実際の日本語では、ごく限定されてしか使用されません。

私たちが英語を学ぶ際（私たちは中学から英語を学んでおります。）、だいたい中学の三年生程度の力があれば、その後は、自力で新聞などを読むことができます。詩だの小説だのという文学の分野の読解までは困難ですが、辞書さえ引ければ、中学修了の力があれば、新聞や雑誌は読むことができます。しかし日常会話の習得は、これではできません。それには日常的に英語を聞き・話をする環境が確保される必要があります。

ところが日本語の習得では、まずローマ字で書かれた新聞はありません。新聞は全て日本語の標準的な書記法である「漢字仮名交じり文」で、しかも縦書きで書かれています。私たちが英語の新聞を読むのと同様

の日本語力を、外国人の人びとに求めるのは、かなりハードルが高いことが想像されます。ごく初期の学習者がローマ字を用いて日本語の学習を始めたとしても、そのローマ字は、日本語の単語の発音を表すことができます。また簡単な単文の発音を表すこともできます。しかしごく短いものでも、文章となると、表し切れません。

いったい日本語はローマ字では表せないのでしょうか？明治以来日本語の表記を欧米の言語と同様に、発音を表す文字で表せないかという試みは、数多く行われてきました。現在でも行われていると言われます。しかしそれは、一般化できないまま現在に至っています。たとえば行政や、たとえば学校や、あるいはマスコミと言われるメディアなどでこの試みが行われて、その成果が世に問われれば、表音文字だけの日本語の表記という方法も、日の目を見たのかもしれませんが、そのようなことはありませんでした。もしそのようなことがあったとしますと、日本語そのものが大きな変革に見舞われることになったはずです。外国人の

皆さんが日本語の習得を目指す時、最も大きな障害となるのが、やはり〈文字〉なのです。

わが国の言語である〈日本語〉を表すその文字は、〈漢字〉と二つの体系の〈カナモジ〉です。二つの体系の〈カナモジ〉とは、言うまでもなく〈ひらがな〉と〈カタカナ〉です。この三つの文字の体系が日本語の表記の基本的な文字となっていていますが、そればかりでなく日本語では、世界で用いられているあらゆる文字が、わが国の言語の表記の中にその位置を占めることができます。算用数字やアルファベットは、日常に流通する文書に、欠くことのできない文字となっております。しかし、これらは歴としたアラビア由来、西欧由来の文字です。場合によってはハンダールなどの他の文字も、日本語の文章の中に、単語としても文字としても挿入することができます。

この日本語を表す三つの体系の文字の内、〈漢字〉は、中国で開発された文字です。本来は中国語を表記するために編み出された文字です。その中国語を表すための文字が、当時文字のなかったわが国にもたらさ

れて、わが国の人びとは、それをどのように使いこなせるかを、恐らく千年という時間をかけて試行錯誤を繰り返して、日本語を表すのに適した文字としてその体系を組み直すという、気の遠くなるような作業が進められました。その結果が現在のわが国で使用されている表記法である「漢字仮名交じり文」の成立です。

〈漢字〉をわが国の言語に適合した文字として使用するという試みの、言わばその最後の仕上げでもあり、わが国最初の、その意味ではわが国の書記言語の先駆けとして登場したのが、『古事記』・『日本書紀』・『万葉集』であり、漢詩集の『懐風藻』でした。取り分け注目されるのが『万葉集』です。『万葉集』に並んでいる作品の表記は、それまで文書として成立していなかった日本語の文章の最初期から、一つの方角を示すことになる音仮名文字による表記にまでの表記法の変遷を示しています。そこで編み出された「音仮名」と「訓仮名」が、「万葉仮名」と呼ばれています。

『万葉集』では、持統朝の宮廷歌人の中心人物であ

り、『万葉集』に取られている作品の作者の中心人物でもある柿本人麻呂の歌は、『万葉集』の初期の歌として、文字の使用の試行錯誤を跡づけている歌として、誠に興味深いものがあるとともに、私のような素人にも「人麻呂の歌」であろうことが分かるほどに、他の歌人作の歌とは際違った違いを感じられる作品が揃っています。なるほど人麻呂が「歌聖」と呼ばれるのにふさわしい歌人であることを、『万葉集』に触れることで知ることができました。

『万葉集』が編まれるには、人麻呂を初めとする歌人たちが製作して表記した作品がなければなりません。その後期では「音仮名」で表されることになるにしても、初期では漢字の「訓読」と「訓仮名」を交えた表記がなされました。漢字の「訓読」を中心に「音仮名」と「音仮名」が配列されている作品から、「音仮名」だけで表された作品へと移行しているのが『万葉集』です。〈漢字〉をわが国の言語に適合して、「音仮名」そして現在使用されている「仮名文字」の開発の手前までが、『万葉集』の表記で明らかにされ

ていると言えます。

文字（漢字）がわが国にもたらされて、文字をわが国の人びとが使いこなせるようになるには、想像を絶する年月と努力が必要だったに違いありません。それを一つのプロセスとして想定してみますと、まずわが列島に、現在の日本語の大本となる言語を話す人びとが住み着くことが必要でした。その人びとがいったいどこからやって来たのか、現状ではまだ謎に包まれたままと言われていますし、現在の日本語も、世界で使われている言語の中に、近しいものを見出すことができないほどに、例の少ない言語だと言われています。言語の分類では、日本語は「膠着語」とされてきて、同様に「膠着語」とされる現在の韓国語と似た配列をしてはいますが、配列以外では相違点の方が大きいと言われて、類縁の言語ということはできないと考えられているようですし、他に類縁を求めることも難しいとされているようです。

私たちが使用している日本語という言語の古形であ

る原日本語というべき言語を使用する人びとが、何時頃この列島に住みついたのか、最も遅くこの列島にやって来たと言われる弥生人がこの言語とともに渡って来たのか、それともそれ以前から住み着いていたと考えられている縄文人がこの言語を使用していて、後に弥生人との交流の中で、原日本語が、弥生人の使用していた言語より優勢となったと考えるか、まだ充分分かってはいないようです。確実に分かっていることは、この列島に人が住み始めたのは、今から一万五千年ほど前のころ、その後五千年と言われている、樺太・北海道、朝鮮半島、雲南・福建・台湾・琉球弧、オーストロネシア・フィリピン・台湾・琉球弧などのコースを経て渡来した人びとが住み着いたと考えられています。しかも一回ではなく、何回かに大きな波の打ち寄せるように渡来したのではないとも言われています。そしてその最後に、今から三千年前ころから、弥生人と呼ばれる人びとが渡来して、わが国も石器時代から青銅器・鉄器の時代へと、急速に変化したと考えられています。弥生人と呼ばれる人びとは、青

銅器や鉄器を携えて、武器・農具・祭器に新たな時代を切り開きました。そして稲作という、その後のわが国の食文化の源となる技術をもたらし普及させました。その文化・技術は、それまでの石器や土器の文化、狩猟・採集という経済を営んでいた縄文人たちを、あつと言う間に席卷したに違いありません。田畑を耕し、武器を備え、その奉ずる神を祀り、九州から畿内、そしてやがて東日本に至るまで支配下に収めました。

その弥生人たちのルーツはどこか、おおよそ見当がつきそうです。今から三千年前と言えば、大陸では周が擡頭して、殷王朝を倒しました。中国の、私たちが知りうる最古の王朝である殷が、北方に興った周によって滅ぼされて、その結果として、南進と呼ばれる人びとの移動が始まりました。これは北方に興った周に押されて、それまで住んでいた人びとが、南へと移動を始めたことを言います。南への移動はその南に住んでいた人びとをさらにその南へと圧迫しました。そのようにして圧迫された人びとが海を渡り、台湾・琉球

弧・九州へというルートが開かれたと考えられます。

弥生人のルーツをこのように考えると、弥生人は当時の中国に住んでいた人びとだということになります。そしてそれまで列島に住んでいた縄文人に比べれば、農業に於いても、軍事に於いても、遙かに進んだ技術・文化を携えて渡来したものと考えてよいはずで、政治的にも経済的にも、原住民と呼んでもよい縄文人たちは、国家を持たない民が国家を営んでいる民と、狩猟・採集経済を営んでいる民が定住し農業という集約経済を営んでいる民との抗争を余儀なくされることとなって、その果てにこの弥生人には、全く歯が立たないままにその支配下に収められていったに違いありません。

弥生人の使用した言語も大陸に由来したものでたつたはずで、中国語は日本語とは全く異なった構成の言語で、言語の分類では「孤立語」と呼ばれます。日本語とは異なつて、語と語とを結びつける糊の働きをすする語はなく、表現は語と語の並びによって行われる構造を採っています。その「孤立語」である古い中国語

を使用する人びとが、圧倒的に優勢な政治力・軍事力・経済力によってわが列島を支配したと考えると、現在私たちが使用しているこの日本語が、どのような形でこの列島で支配的な言語となったのか、更に謎が深まったと言わざるを得ません。政治的・経済的に優位な弥生人が、使う言語を中国語から列島土着の縄文人の言語に譲るということが、多分起きていたということとです。これは極めて理解を超えたことではないかと思わざるを得ません。

その謎は謎として、その弥生人たちが支配したこの列島も、その最初期から使用された言語は原日本語でした。というのも、日本語の表記が世に出た八世紀には、〈漢字〉の読みとして音読と訓読が既に整理されて、その音読と訓読を使って「音仮名」と「訓仮名」が考案されていること、そして読み下し漢文、言い換えれば中国語の文献の翻訳文ができていたことを見れば、原日本語は、その席を譲ることなくわが列島の言語としてその支配的地位を保ち続けて来たと言えます。また当時の外交関係、特に後期の弥生時代では、

圧倒的な勢力を誇る大陸の国家が、朝鮮半島を通じてわが国に圧力をかけて来ていました。それに対抗するには政治的な実力と外交交渉力が求められます。前者は独立した国家の設立、後者は言語による交渉力の構築です。言語による交渉力と言っても、それは中国語の力を意味していました。中国語の力を付けるということは、中国との交渉力の増大ばかりでなく、先進国である中国の文献の読破を必要とし、「記・紀・万葉」の成立に先立って、現代には伝わらなかったにせよ、多数の文献が編まれたことが想像されます。

「記・紀・万葉」と『懐風藻』、これらの書物は、その後のわが国の書記文化にとつて、大変象徴的な書物と言えます。これらは大きく二つに大別されます。『日本書紀』と『懐風藻』は、前者はわが国の正史として、わが国の公式の歴史書として、漢文で表されています。中国の正史を参考に編まれた書物で、記録文学の祖型をなしていると言われます。

『懐風藻』は、恐らくそれまでに渡来した中国の文献にある漢詩を参考に、当時の上流階級にあった人び

との作った漢詩が収められた漢詩集です。どちらも中国語（漢文）で表されています。

『古事記』は、読み下し漢文で表されています。ここに用いられている文体は、現代にまで繋がる文体と言えます。ただしそれは、漢字の訓読といわゆる万葉仮名で表記されています。『古事記』は、読み解くのに困難を極めたと言われている書物で、本居宣長の『古事記伝』が現れるまでは、一般には知られることがなかった書物と言われています。

『万葉集』は、言うまでもなくわが国最初の歌集です、長歌・短歌・旋頭歌などの和歌や漢詩が収録されています。その表記が極めてユニークで、初期の表記は訓読・訓仮名・音仮名が適宜用いられています。後期になると、ほぼ音仮名だけの表記となります。題詞と左注は漢文で表されていて、歌の部分は和文です、その他は漢文体で書かれているという体裁になっています。十世紀の中頃、「梨壺の五人」と呼ばれる勅撰和歌集『後撰集』の選者の五人の学者が、この『万葉集』の訓読を試みて、以後私たちの読める歌集

として現在に至っています。

わが国の公式の文書は、当初から漢文によって記されていて、平安初期までの官人は、当時の中国語を不自由なく操ることができたと言われています。その後もほぼ現代に至るまで、公式の文書は漢文で記されていました。このような文体を「漢文体」と呼びます。

またもう一つ、短歌や長歌という和歌は、仮名文字で書かれました。和歌が挿入された「歌物語」や、日記文学や随筆が盛んに書かれましたが、これらは仮名文字で書かれました。このような文体を「和文体」と呼びます。仮名文字も現在のようになっただけではなく、一つの音が幾つもの表記法で書かれていて、読みこなすのはなかなか困難だと言われます。

しかし一つ注目すべきことは、この「漢文体」と「和文体」という書記言語の二つの流れも、ところどころでフィードバックを起していることです。一つは平安期に成立した仮名文学も、書かれた当初は仮名文字だけで表されていたのですが、書写を繰り返しているうちに、現在私たちが読んでいるように、仮名

文字が漢字に置き換えられて、言わば「漢字仮名交じり文」となってしまうことです。もう一つは、漢文を日本語として読み下すに当たって、当初は「乎古止点」と呼ばれる記号類を駆使して、漢文を日本語として読み解こうとしました。更に進んで現在に至るまで、右側に送り仮名、左側に返り点と呼ばれる訓点を配して読み下す方法が採られています。またもう一つ進んで、漢字を日本語の配列に並べ換えて、助詞や送り仮名としてカタカナを挿入するようになりました。これによって漢文も、「漢字仮名交じり文」となったのでした。

現在ではこの「漢字仮名交じり文」が、日本語の標準的な表記法となっております。仮名文字だけで書かれた「和文体」も、〈漢字〉の助けを得なければ充分に文章としての役割を果たせないことが分かりましたし、漢文も仮名を交えることで日本語の文章として読みこなせるようになったということです。「孤立語」である中国語を表す文字として開発された〈漢字〉は、音に意味のある言語を表す文字として、「表意文字」と呼ばれる文字として登場しました。音の組み合わせ

わせによって意味を表すのではなく、一つの音が一つの意味を表す言葉を、その一つの音を表しつつ意味も同時に表す文字として、〈漢字〉は現れて、わが国にもたらされました。

英語を学ぶ時にはまず単語から、単語を習得しつつその語を含んだ「語彙」を深めるとというのが英語の習得の鉄則だとすれば、日本語を習うにはこの〈漢字〉の習得からというのが鉄則であることを、ここに確認したいと考えます。なぜならば、「表意文字」と呼ばれるこの〈漢字〉は、それだけで「文字」でもあり「単語」でもあるからで、日本語の「語彙」の形成に欠くことのできない要素となっているからに他なりません。

残念ながら現在のわが国の視覚障害者には、これを克服しようという気運はありません。また視覚障害者を取り巻く健常者の皆様にも、これを何とかしようという気運はありません。

この現況を、危機感を持って感じ取る視覚障害者の登場を待つばかりです。

点字から識字までの距離(一一三)

通所支援事業所へのサービス(三)

山内 薫

キッズサポートリマの毎日新聞社の取材

マルチメディアDAISY図書を作成して全国の図書館や特別支援学校などに配布している公益財団法人伊藤忠記念財団から、「マルチメディアDAISY図書を施設で利用しているところを取材したいという依頼が毎日新聞社からあったが、ひきふね図書館から近々施設に行くことはあるか」と電話がかかってきた。早速キッズサポートリマに連絡して急遽翌週におはなし会を実施することになった。前回参加してくださった筑波大学大学院のKさんにも連絡し、当日来て下さると快諾を頂いた。

二〇一六年七月一日(月曜日)子どもたちが特別支援学校から帰ってくる午後四時過ぎからおはなし会

を始めることになった。図書館側の参加者は私と障害者サービス担当のOさん、そして筑波大学のKさんの三人で、ひきふね図書館に午後三時に集合し、出し物の確認や簡単な練習をした後自転車で行き向かった。伊藤忠からはいつもマルチメディアDAISY図書のことでお世話になっているYさんと広報部報道室の女性の二名、そして毎日新聞の記者が参加した。子どもたちは小学生六人と高校生一人が参加してくれたが、高校生はALSで、特別支援学校から帰ってきて一時間ほど点滴を受けていた。

始めにOさんとKさんが大型絵本の『のりものいろいろかくれんぼ』のりものいろいろかくれんぼ(これなあに? かたぬきえほん) (いしかわこうじ作・絵 ポプラ社 二〇〇七年) を読



「のりものいろいろかくれんぼ」を見る

んだ。この絵本はクイズ形式の絵本で子どもたちが手を挙げて乗り物の名前を答えてくれた。

次に巻紙芝居の『おおきなおおきなおいも』（市村久子原案 赤羽末吉さく・え 福音館書店 一九七二年）をKさんと二人で上演した。この巻紙芝居についてはすでにこの連載の九二で次のように紹介したことがある。

「この巻紙芝居は、一九七二年一〇月にこの本が出版された直後の一二月に、図書館のクリスマス会で上演するために、前の晩に一晩で作ったもので、障子紙一卷半を使って作成した。この絵本は子どもが描いたような単純な黒の線描に桃色を着色した八八ページの絵本なので、何とか一晩で描き上げること



巻紙芝居「おおきなおおきなおいも」

ができた。芋掘り遠足が雨で一週間延びることになった幼稚園の園児たちが紙をつなぎ合わせておおきなおきなお芋を描くという話で、描き上げたおおきなお芋の場面が延々一四ページも続く見せ場がある。この部分を実際のおおきな一枚の紙にできないかというのがこの巻紙芝居を作成した動機で、巻紙芝居ではこの部分が三メートルほどのおおきなお芋として描かれている。この巻紙芝居は完成以来様々ところで上演されたり紹介されたりしてきた。三五年ほど前に女性雑誌の「an・an」に写真入りで紹介されることになったときに作者の赤羽末吉さんに直接電話をして著作権の許諾を頂いた。その後も様々な図書館などに貸し出しされ、その都度、紙を巻くための木の棒が付いたり、巻紙芝居を入れる箱が付いてきたりして今に至っている。巻紙芝居は紙の両端を二人の演者で持つて、一人が絵を開いていき、一人が巻き取って演じていくので、ある程度の練習が必要となる。」（『うか』第九八号 一〇〇〜一〇一ページ）また、前回記したように、この巻紙芝居を昔見た施設長のSさんが原本を買

つてきて職員に作るように進めていたものである。

この巻紙芝居はとても好評で、さまざまな図書館や関係者に貸し出しされ、恐らく二〇〇回以上全国各地で上演されていると思う。破れたり切れたりしたところもあるがその都度補修して今に至っている。制作以来五〇年になろうとしているにもかかわらず、障子紙の丈夫さには驚かされるばかりである。上演後には子どもたちが盛んに拍手してくれた。

続いて、施設では定番のやはり大型絵本の『はらぺこあおむし（ビックブック）』（エリック・カール作・絵 もりひさし訳 偕成社 一九九四年）をKさんと私が読んだ。前回の訪問ではこの本が好きだという三人の子どもたちに、iPadに収納されたマルチメディアDAISY図書版を見て貰ったが、画面が小さいために、とても見づらく疲れてしまったようなので、今回大型絵本を持って行って上演した。

次にマルチメディアDAISY図書をプロジェクトAを使ってみんなで見てもらえたらということのパソコンとプロジェクターを用意して頂いた。壁に映すこ

とを想定していたが、多くの子どもが床に横になって
いる状態なので、いつそのこと天井に映像を映したら
どうだろうかということになり、部屋を暗くしてプロ
ジェクターを天井に向け、全員床に寝転んでマルチメ
ディアDAISY図書を鑑賞した。伊藤忠のYさんが
考案したオリジナルのマルチメディアDAISY図書
『パンがパン』は一六種類のさまざまなパンが登場
する。初めのうちはパンの輪郭が鮮やかな色で示さ
れ、一部分だけそのパンの実際の映像がのぞける場
面で「あなたはどなた？」「きみはだれ？」「どちらさ
ま？」等と声がかかると、「パンがパン」と手拍手

にも大勢
の音が聞
こえ「ポ
ワン」と
いう音と
ともにパ
ンに霧が
かかった



天井に映した「パンがパン」を見る

状態の画面になり、その霧が晴れてパンが映って「私はクロワッサンです」という声が流れる。次は「おいらはベーグル」そして「わたくしはロールパン」、「ぼくはコッペパン」、「あたいはチョココロネ」、「じぶんはメロンパン」 「まろはホットドックでござやる」等々一人称代名詞をそれぞれ変えながら話は進んでいき、後半は初めにパンの姿が映し出されてクリムパン、あんパン、ジャムパン、カレーパンと「わたしは」のあとにパンの切り口が映し出される。最後の前は「WHO ARE YOU?」の呼びかけに「I'm HAMBURGER」と英語になり、最後はまた輪郭が現れて「おれは何もの」との自問に「パンがパン、ポヨヨーン」「せつしやフライパン、カーン、おそまつ」で終わる。

全体で五分のこの作品をみんなで天井を見上げながら鑑賞した。できればパンがパンのところで見ながら一緒に手拍子を打てれば良かったと思ったが、そこまでの余裕はなかった。

その後、伊藤忠のYさんが布団に寝ているALSの

高校生の枕元に座ってiPadに収納された『もっちゃうもっちゃうもっちゃう』(土屋 富士夫作・絵 徳間書店 二〇〇〇年)を見せた。彼女はiPadの画面を終始じっと見つめていたが、この件について後日所長のSさんから次のようなメールを頂いた。

「昨年、山内様始め、墨田区立ひきふね図書館の皆様が当方へお越し下さいました際に、マルチメディアアイジーを御覧になった、全身性障がいのある女兒の保護者様と、先々に面談の機会があったのですが、当該女兒は普段、目を自由に動かすことが難しいため、幼児期から『対象物を見る』訓練を定期的に受けていたのだそうです。その後本人が、マルチメディアアイジーを読むことに集中し、目を動かしていたことに、保護者様は、長い間の訓練が活かせる媒体に出会えたことを、非常に喜んでおられましたことを、遅ればせながら、報告申し上げます。」

マルチメディアDAISY図書にこのような効果があることが確認できたのだった。

さて、今回のキッズサポートりまでのおはなし会に

ついで、毎日新聞二〇一六年八月七日朝刊に次のような記事が掲載された。

「四月の障害者差別解消法施行で、図書館などの施設で障害者への合理的配慮が義務づけられた。伊藤忠記念財団は障害者もつた子供たちが読書を楽しめるよう、音声で読み上げる電子図書を国際規格「マルチメディアDAISY（デイジー）」で制作。各地の図書館と共同して普及に取り組んでいる。

東京都墨田区の障害児デイサービス施設『キッズサポーターりま』を、区立ひきふね図書館の職員らが訪れ、デイジー図書を使った読書会があった。天井に画面を映し出したあと、タブレット端末を活用。最初にボタンを押せばページは自動進行するため、紙の本をめくれなくても、読書ができる。

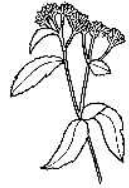
参加した7人の子供たちは、部屋のあちこちで食べるように端末を見つめた。進行性の筋ジストロフィーで自分ではほとんど動けない高校一年の女子生徒（一六）は、気に入ったせりふを言おうと、声を絞りに出す。自分で読書する貴重な機会だ。

三月まで同図書館の職員だった山内薫さん（六六）は「図書館に来ることが難しい子供たちには、こちらから行かないと本に触れる機会がない。デイジーは発達障害、肢体不自由、視覚障害などに対応しており、普通の子供たちと同じように楽しめる」と語る。

デイジーは音声で読み上げている部分をカラーで表示し、肉声の正しい発音で録音しているのが特長。図書館や学校に無償提供している。これまでに、二七八タイトルを延べ四三二七カ所に配布した。今年度は九道県立図書館と協力、岡山県は「ももたろう」、奈良県は「わらしべ長者」など地元の民話を、五〇一五分程度、方言で収録する「日本昔話の旅」も行っている。財団の矢部剛・電子図書普及事業部長（五五）は「図書館から学校や地域に広がる。本を読む楽しさだけでなく、自分で読めたことで自信がついたり、友達と一緒に見ることで社会性が向上したりと、副次的な効果も出ている」と話している。【柴沼均、写真も（デイジーを熱心にみる障害者もつた子供たちⅡ東京都墨田区の「りま」で）】

わたくしごと

木村多恵子



水絵の具（みずえのぐ）

ある晴れた秋の昼下がり、読み始めた本の、きりがいいところまでと続けていたが、気づくと思いの外時間が経っていた。大分疲れた頭と、すいたおなかのため、お昼ご飯に切り替えた。いつもよりのんびり食後のお茶を飲み、ラジオを聞いた。絵画についての話である。

「次はカジミール・マレーヴィチについてお話ししましょう。」（難しい名前！初めて聞く名前だ。）

「淡いヴェージュ色の正方形のキャンバスの中に、右に傾いた、更に色薄い白の正方形を描いた、マレーヴィチ、（白の上の白い正方形（White on white））は1918年ニュー・ヨーク近代

美術館所蔵の油彩です。」

わあ、すてき！綺麗！と言いながらわたしは反射的に立ち上がり、部屋中をゆつくり歩き始めた。番組の途中から聞いたので、解説者の名前も、どういふ人なのかも分からない。話を聞いているうちに、この絵について、最初の説明を聞いただけで、何故わたしが引きつけられたかが分かってきた。

解説者は言った。

「マレーヴィチの、この絵には対象物が無いのです」

そうなのだ。対象物はわたし自身が勝手に、この白いキャンバスに想像すれば良いのだ。心の揺らぎも含めて何時でも何でも描けるのだ。

一人で楽しめるすてきな遊び！いい気な自己満足？それもいいではないか！心の中でなら技術も道具もいらない。どのみち才能など無いのだから自由に羽ばたこう。それなら今までだって何時でもできたはずでしょう？と誰かが囁く。

いずれにしても、この「白の上の白い正方形」はわたしに大きなインパクトを与えてくれた。

番組は直に終わり、秋元雄史（あきもとゆうじ）という東京藝術大学美術館長・教授と分かった。

例のごとく図書館へ行き、秋元雄史氏の著作で、マレーヴィチの『白の上の白い正方形』の解説がある本を探していただいた。

あることはあったが、わたしは西洋図書館にこの本を注文するのに気恥ずかしい思いがした。その題が『武器になる知的教養美術鑑賞』というわたしには全く無縁なタイトルなのだ。

が、とにかくわたしが知りたい部分だけを読んでいただいた。

カジミール・マレーヴィチ（1879～1935）
年、ロシア生まれ。

「絵画は誕生して以来、対象物に縛られることで不自由さを余儀なくされている」

というマレーヴィチ自身の考えから、対象物を一切排除して無対象の芸術、という前衛的な方向を目指した現代絵画美術家のようなのである。

総体にわたしは子供の頃から白が好きだった。理由はほんの少しある明暗に、白は直接わたしに呼びかけてくれたからだと思う。

わたしは、この白に白を重ねたキャンバスにおらずと絵筆を入れる。

小さい女の子だ。

真っ白なスカートに、当時流行り始めた透けるような白地に赤い大小の熊の絵柄のナイロンブラウスは、わたしのお気に入りであった。熊の絵模様と言われても、わたしには熊とは分からず、ただ大きい赤と小さい赤がてんでんと散らばっているだけのもので、それが熊とは認識できていなかった。

毎日この服を着て、独りでブランコ遊びをし、鉄棒の逆上がりをし、10メートルはある急坂の土手を、最

初はこわごわ、ゆっくり、滑り始め、やがてスピードが増し、着地は土の地面に足がどんとぶつかって止まる。本当は地面に着地したその足でさらにぱっと立ち上がってそのまま走れるようになりたかった。が、とうとうその域にはいたらず、それより学院長の命令で、「土手滑りは禁止」とされてしまった。

禁止、と言われてもわたしひとりが直接院長からしかられた訳では無かったので、本当は安心した。それにこの遊びをしていたのは主に小さい男の子たちであり、女の子はわたしひとりであったから自然に止められたのだ。

それにしても男の子たちはすごいなあ。最初この土手滑りを始めた切っ掛けは、鬼ごっこをしているとき、鬼に捕まりそうになって逃げ場を失い、この急な土手を滑り降りたと言うのだから……。考えてみれば、真似事で、男の子よりスピードはなかったものの小学2年のわたしは無鉄砲だった。

こんな遊びをしていた日々のある朝、起床の鐘で起

こされて着替えをしようとして慌てた。夕べもきちんと白いスカートを畳んで枕元に置いたはずなのに、大好きなそれが無い。布団の中に潜り込んでいるだろうか？寝巻きのままで布団を畳み、押し入れに片づけたがスカートは出てこない。「あれえ？」小声でつぶやいていた。

すると大きいお姉さんが、「多恵子ちゃん、スカートを探しているのでしょうか？ ちよつと待っててね」、そう言って寮の外へ出て、洗濯物干し場から「おまちどうさま、ほんとは起床前に取ってきておきたかったんだけど、まだ乾いて無かったのよ」

「え？和子さん洗ってくださったの？」
「もうちよつと乾くといいいんだけど……」とお姉さんは言った。

小さいわたしは驚きと感謝をどう表したらいいかわからず、ただ「夜中に洗ってくださったの？」と言うと、「しっ！」とわたしの肩を押さえた。いいから黙ってらっしゃいとも言いたそうだった。

この寮の先生は目が見えず、気むずかしい方なの

で、汚れが目立つ白、しかも泥で汚して寮に帰ってくるわたしを許すはずがないと、彼女はわたしを庇って黙っていてくれたのである。さらにこのご厚意は今日が初めてではなさそうだ。大きいお姉さんたちは、手分けして小さい女の子たちの身の周りの面倒を見てくださっている。和子姉さんはこのお姉さんたちの中で一人だけ少し目が見える人なので、わたしの泥汚れを目ざとく見つけてくれたのであろう。彼女はわたしの「ありがとう、ごめんなさい」の言葉を受け取ってくれた。そしてこのお気に入りのお白スカートは、この一夏で諦めた。

3年生になって、明るく和らいだ5月のある日、ひとり院内散歩をして、花壇の花たちが南に向いて咲き匂っているところへ出た。わたしから見えて一番左端に、素敵に白いものが見えた。手を伸ばして触ったら、開いたばかりのお花だった…。偶然側に居合わせた先生に聞いた。

「これはなんですか？」

「白いバラよ」

たった一輪の白いバラが目の前で頬笑んでいる。花びらの形も重なり具合も見えない、ただ白い固まりのそれは「白きバラ」なのだ。小説や物語に書かれている「気高さ」とはこのようなものをいうのだろうか。

ときどきそっと、冷たいような、日差しを浴びて暖かきがあるようなバラの花に右手をのばして、そっと触れ、引つ込めては、またそっと触れていた。

そして、この気高く気品のある白をこのわたしの目に染みこませた。

その日から2、3日、いいえ一週間は毎日何度も白いバラに会いに行った。

が、悲しいことに孤独な白バラは、わたしの目にさえ色あせ、黄ばみ、やがて花びらは散ってしまった。

側には濃淡様々な紅バラが幾本も美しく咲いていたが、白を失ったこの花壇には足を向けなくなった。院内の他にある花壇で、わたしが行けるどの花壇にも純

白のバラは見つけられなかった。それだけにこの一輪はわたしを充分満たしてくれた。

待ち焦がれた4年生の5月が近づくと、どきどきさせて咲きいずる白を待ちわびた。毎日朝に夕にその花壇へ行ったが見つかからない。

もう5月は終わろうとしていた。わたしが毎日何かを探していることに気づいていたのだろう。去年「白いバラよ」と教えて下さった先生が聞いた。

「なにを探しているの？」

「あの真つ白いバラです」

「ああ、そう言えば今年は咲かなかったわね。白い花はたいていその花の最初に咲いて、だんだん弱り、花木が弱ると白い花は咲かなくなるのよ」

「え？」とわたしは言ったきりだった。

同じ4年生の6月になってから、去年あの白いバラを見つけた南側の花壇とは真反対の北側に向いた土手、当然陽が当たらない、坂と階段が続く道を上から

降りてきて、右手の土手に光る白いものを見つけた。

「もしや？まさか！」と思いつながら注意深く土手の中腹まで登っていった。

「おお！なんとまあ！あなたはこちらにいらしたのですか？」でも、でもこれはなんと哀れなバラだろう。せいぜい3、4枚の葉っぱに囲まれてたった一本の細い木？木とは言えないほどの細枝に一輪白いバラは咲いていた。

「ああ。あなたはどうかやってここへきたの？小鳥さんが種を運んでくれたの？」

わたしは土手のその辺りの土を指で掘ってバラの根本にかき寄せるようにして、枝が倒れないようにした。けれどもひよろひよろしたその花はやつと立っていた。自分の寮に戻り、バケツに水を入れて運び土にかけた。肥料はわたしにはどうにもならない。雨が降らない日は水やりを忘れないようにした。あれほど美しい純白ではなかったけれど、それでも一週間近くは「わたしは白いバラよ」と喜んで咲き続けてくれた

し、わたしも満足だった。

この北の土手のバラが散ってから、真夏も秋も冬も水やりだけは気をつけていた。そして春が近づいたある日、水やりだけだったけれど、わたしは手塩にかけたという誇らしさも手伝って、一度仲間に「ビーンズハウス（学院内の一つの建物の名前）の土手のバラはわたしのバラよ」と言った。

ふーんというように誰もなにも言わなかった。が、あの和子姉さんだけが、「そんなこと言っちゃだめよ」と静かに諫めた。なぜだろう？「水やりをしていたのは知ってるわ。でも、だからといって自分の花だって言っちゃ駄目よ。みんなのために咲いてくれたのだからね」、ちよっぴりしゅんとなったわたしだったが、なるほど、そう言いでしたら大変だ。たまたまこの花にはわたしがあげられたけれど、みんながみんなできるわけではないのだ。それにわたしのお気に入りのバラやそのほかたくさんの花たちの面倒を見てくださっている人たちもいるではないか。と、すっきり納

得できたし恥ずかしくもなかった。

5年生は不安と期待があふれかえった。南の花壇には色とりどりのバラは咲いたけれど、白は見あたらなかった。白はその花の初咲きと聞いたので早くから気をつけていたのに：寂しかった。悲しかった。でもあの北側の土手はどうだろう？6月になってしとしと降る雨の中、か弱いバラは葉っぱ二枚と蕾一つを付けたが、けなげな白バラは2、3日開いて、やがて散り果ててしまった。

とうとうわたしは6年になっても中学になっても「気高く清き白バラ」とは学院内では会えなかった。

6年生のバラの咲く季節の初めに偶然「白いバラ」を教えて下さった学院のO先生が街の花屋さんへ連れて行ってくださった。花屋さんは可愛い赤い花のいろいろを見せてくれたが、わたしは「白いバラ」と言うのはなんとなく気恥ずかしく、「これじゃないんで

す」としか言えなかった。が、いくつもの甕の中から白バラと思われるものを見つけ、じっと眺めていた。白いバラだろうと思いつつもその茎にはたくさんの葉っぱが密生し、お花も学院で見つけたのとは丸みも違うので、これは本当のバラだろうか？わたしの思い違いだろうか？心配になった。わたしがその甕から離れないことに気づいたお花屋さんが、「一本持つてごらん下さい」と言った。わたしはもぞもぞと「でもわたし、買えないのです」とやっと小声でいった。わたしが学院の子であることは察しが付いていたのだろう。もう一度「持つてごらん下さい」と言ってくださった。わたしは先生の方を振り向いた。「持たせていただく下さい」と先生は言った。「お願いします」と右手を伸ばし、お花を握らせていただいて、左手を茎に添えた。子供とはいえ、売り物であることは分かっているから、恐ろしさのあまり直ぐお返しした。「もういいの？」と言われてやっぱり「もうちよつと持たせてください」といい、やはりすぐお返しした。頬ずりすることさえできなかった。

あの優しいお花屋さんの声が今も蘇ってくる。ぜいたくなひと時であった。

今なら分かる。○先生はこの数年のわたしのことを静かに見守っていてくださり、素晴らしい機会を与えてくださったのだ。

これらわたしにまつわる白のいろいろ。スカートもブランコも、鉄棒も、あの急勾配の土手も。そして南の気高い白いバラも、北向きの土手のちよつと見劣りするとはいえ、わたしには大切な白いバラ。そうしてお花屋さんが持たせてくださった立派な白いバラも、全てカジミール・マレーヴィチが教えてくれた白いキヤンバスに描いた。

なんという自由だろう。そうしてわたしは睡魔に落ちてゆく。

2020年7月31日（金）



漢文のページ

苛政猛ニ於虎一也 ヨリモ

孔子過ニ泰山側一。有下婦人 リテ

哭ニ於墓一者上而哀。夫子式而 シテ

聽レ之、使ニ子路問一レ之曰、「子 ニ

之哭也、壹似ニ重有レ憂者一。 ニ

而曰、「然。昔者、吾舅死ニ於 シ

虎一、吾夫又死焉、今、吾子 ガ

又死焉。」夫子曰、「何為 レゾ

不レ去也。」曰、「無ニ苛政一。 ハ

夫子曰、「小子識レ之、苛政 ハ

猛ニ於虎一也。」（礼記、檀弓下） ト

漢文名作選第2集「故事と語録」大修館書店による

礼記 らいき

前漢時代の儒教の経書。唐代以降、五経の一つとして尊重された。

苛政は虎よりも猛なり

孔子泰山の側を過ぐ。婦人墓に哭 こく

する者有りて哀しげなり。夫子式して ふうししよく

之を聴き、子路をして之に問わしめて曰 い

わく、「子の哭するや、壹に重ねて憂い うれ

有る者に似たり。」と。而ち曰わく、 すなわ

「然り。昔、吾が舅、虎に死し、吾が わ

夫又死し、今、吾が子又死せり。」と。 いまわこまたし

夫子曰わく、「何為れぞ去らざるや」と。 なんすさ

曰わく、「苛政無ければなり。」と。 かせいな

夫子曰わく、「小子之を識せ、苛政は ししょうしこれしる

虎よりも猛なり。」と。 もう

（読み下し文は、現代仮名遣いにしました。）

苛 政 ハ 猛 於 虎 ヨリモ 也
 孔 子 過 グ 泰 山 ノ 側 ヲ 。
 有 リテ 婦 人 哭 スル 於 墓 ニ 者
 而 哀 シ ゲナリ 。 夫 子 式 シテ 而 聴 キ
 之 ヲ 、 使 メテ 子 路 フシテ 問 ハ
 之 ニ 曰 ハク 、 「 子 之 哭 スル 也 、 嗚
 ニ 似 タリト 重 ネテ 有 ル 憂 ヒ
 者 ニ 。」 而 チ 曰 ハク 、 「 然 リ 。 昔
 者 、 吾 ガ 舅 死 シ 於 虎 ニ 、
 吾 ガ 夫 又 死 シ 焉 、 今 、 吾 ガ 子
 又 死 セリ 焉 ト 。」 夫 子 曰 ハク 、 「 何
 為 レゾ 不 ル 去 ラ 也 ト 。」 曰 ハ
 ク 、 「 無 ケレ バナリト 苛 政 。」 夫 子
 曰 ハク 、 「 小 子 識 セ 之 ヲ 、 苛 政
 ハ 猛 於 虎 ヨリモ 也 ト 。」

- 哭 = 悲しんで大声をあげて泣く。
- 夫子 = 先生。ここでは孔子のこと。
- 式 = 車上で行う礼。
- 嗚 = まったく。ほんとうに。
- 苛政 = 苛酷な政治。
- 小子 = 師が弟子を呼ぶ語。

虎よりも
 こわいのは…



一 機関誌『うか』第一二〇号の発行

本誌・機関誌『うか』の第一二〇号を、やっと発行できる運びとなりました。

本誌は、編集・印刷・製本・発送という一連の流れを、会員の皆様の手作業によって行っていたいております。その作業は、神奈川県民センターという神奈川県、市民がその活動のために利用できるオープン・スペースを設けた施設を利用させていただいて行っております。

今年・年明けには、誰も想像していなかったような事態が、二月から起こり始めました。しかし当初は国民のほとんどの人が、さほどのことはあるまいという認識だったと思います。ところが三月・四月と進みますと、それが如何に重大な事態であるかが、徐々に明らかになって参りました。言うまでもなく新型コロナウイルス・ウィルス・COVID-19の蔓延です。

このことはここで申し上げるにも及ばないことです。が、しかしそれでもパンデミックという事態がどんなものか、誠に想像を絶するものであることを、その

後、骨身に染みて知ることになりました。政府や自治体からは行動の自粛が呼びかけられて、可能な限り外出をしないことが求められました。

異口同音に言われることで、私も同様に思うことですが、これによって当初は、自宅に籠もらざるを得なくなり、そのことを大いにストレスに感じていたのですが、そのうちに逆転して、用件ができて外出しなければいけないことになると、むしろそれが億劫に思うようになって来たことです。自宅に籠もって外へ出ないのが、だんだん心地よくなって来てしまったのでした。それもどうやら私一人のことではなく、多くの方がそう感じているらしいことを知りました。小さなことではありますがこのことは、社会のちよつとした病理ではないかとさえ思われます。

そんな中、本誌は、この春・四月に発行する予定でしたが、公共団体の運営する施設は、一早く新型コロナウイルスの対策に乗り出して、四月ごろから全面的に休館となりました。本誌の印刷・製本の作業を行っていた県民センターも同様に休館となつて、その作業を行うことができなくなりました。現在は全くの休館ということではなく、時間や人数の制限を設けつつ、作業がで

きるようになって参りました。

現在もこのパンデミックは継続中で、今後の流行がどのようになって行くかは、全く分かりません。一見日常を取り戻しているように見える現状も、日々の感染者の数だけ見れば、強烈な自粛ムードに支配されていた四・五・六月のころよりも多いのです。クラスターも広範囲に発生しているようです。注意深く対処して行きたいと思えます。

二 賛助会員の皆様への御礼

二〇一九年度にも多くの方に賛助会費をお納めいただきました。誠にありがとうございます。

皆様のご芳名は、左の通りです。

村田忠禧様、 木原純子様、 関口常正様、
河村美智子様、 馬場威力様、 政井宗夫様、
武田幸太郎様、 田崎吾郎様、 大滝政雄様、
坂口喜代様

深く御礼申し上げます。有効に使わせていただきませす。

三 日本漢点字協会

日本漢点字協会は、この春、解散しました。

旧会員に対して、まだ連絡はありませんが、「点字毎日」の報道では、解散ということになったようです。

会長をお勤めになっておられた川上先生の奥様・川上リツエ様が急逝されて三年を超えました。この間、臨時に運営に当たって下さっていた加藤俊和氏は、まず当初に、会費の徴収を停止し、会員の資格を停止なさいました。続けて会の残務の整理に入ることを理事会に提案し、了承されました。その後は加藤氏を中心に、整理を進めてこられたものと思われます。

現状で私どもが分かっているのはこれだけです。

私が最も気になることは、多くのボランティアの皆様の手によって製作された漢点字書の行方です。本来ならば漢点字使用者が力を合わせてそれを守らなければいけないものですが、現状としては、そのような呼びかけはありません。旧会員である漢点字使用者からも、声が上がっている様子がありません。

以上が現在知り得る状況です。

編集後記

▼冒頭で岡田さんが書かれているように、今回の新型コロナウイルスにより、本誌も2回の休刊を余儀なくされ、やっと、各種の活動制限の中で本誌を発行する機会を得ました。その活動は、神奈川県民サポートセンターで行っていますが、しばらくの休館の後に利用が再開されたとはいえ、1グループが利用できるスペースは、1日2時間まで、人数は4人までという非常に厳しい条件が課せられています

▼新型コロナウイルスの感染拡大は、いつになったら収束するのか全然予測はつきませんが、これを契機に世の中はテレワークの拡大など大きな変化のまった中にあるわけです

▼われわれの活動は、当初からパソコンを主要な道具として、パソコン通信を利用したり、いわばIT技術を駆使した活動をしていたものです。しかし、今やインターネットを中心としたIT革命の進行は、想像を絶するものです

▼超高性能になったスマホを手に、ちよつと便利な使い方を覚えて、こんなことも出来るのだと、感心している今日この頃です。

木下 和久

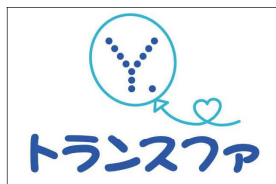
(有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページで。



URL: www.ytrans.net

〒231-0063横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1105

電話: 045-263-0306

FAX: 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada_tr_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は1月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。